

2022 年アルメーレ国際園芸博覧会  
日本国屋外出展事業計画

2022 年アルメーレ国際園芸博覧会  
屋外出展実行委員会

## 1. 屋外出展整備計画

### (1) 与条件

#### ① 日本国出展計画

- 「国際園芸博覧会日本国出展委員会」の第1回会議（令和2年3月16日）において、2022年アルメーレ国際園芸博覧会における日本国出展計画を承認。

#### 【テーマ】 SATOYAMA Farm Garden

関東平野にみられる農家及び屋敷林をイメージし、屋敷地と農地、里地、里山が一体となった日本の伝統的な循環型のライフスタイルを表現するとともに、現代の花卉園芸技術や花の文化を屋内・屋外トータルで展示する。

#### 【日本国出展方針案】

**展示館**：関東地方の農家をイメージした展示館。フロリアード事務局の指定するリサイクル可能な材料を100%使用し、日本の伝統文化と環境技術が調和した建物内で、日本の花卉園芸技術を屋内展示でPRする。

**広場**：農家の庭先の広場。こいのぼりや灯籠など和風のしつらえを行い、イベントやレセプション会場などに活用する。

**里の杜**：里地の風情を持つエントランスエリア。川口市安行の植木や技術を用い、四季の花木やカエデ等により、日本の四季の風情を日本庭園的に表現する。

**菜園**：花や野菜など季節に応じた栽培ができる畑。展示やイベントを横浜にちなむ形で行い、屋内展示とあわせ横浜園芸博覧会をPRする。

#### ② 新型コロナウイルス感染拡大下における出展

- 令和3年3月11日時点において、オランダの感染症危険レベル（外務省発表）は「3」であり、渡航中止勧告が発出されている状況。
- こうした状況がいつ改善するか、その見通しを立てることは非常に困難であることから、屋外出展の計画にあたっては、最も厳しい見通しとして、現地企業により実施設計、施工及び施工監理を行うことを前提とし、それが実現可能な出展内容として計画しておく必要がある。

③ 国際園芸博覧会終了後の取扱い

- 2019年の北京、2016年のアンタルヤ（トルコ）とは異なり、博覧会終了後は原状回復が必要であり、大掛かりな庭園整備が困難。

(2) 屋外出展基本方針

○ 基本方針

日本国出展計画におけるテーマ、日本国出展方針案を踏まえ、屋外出展を計画することとする。

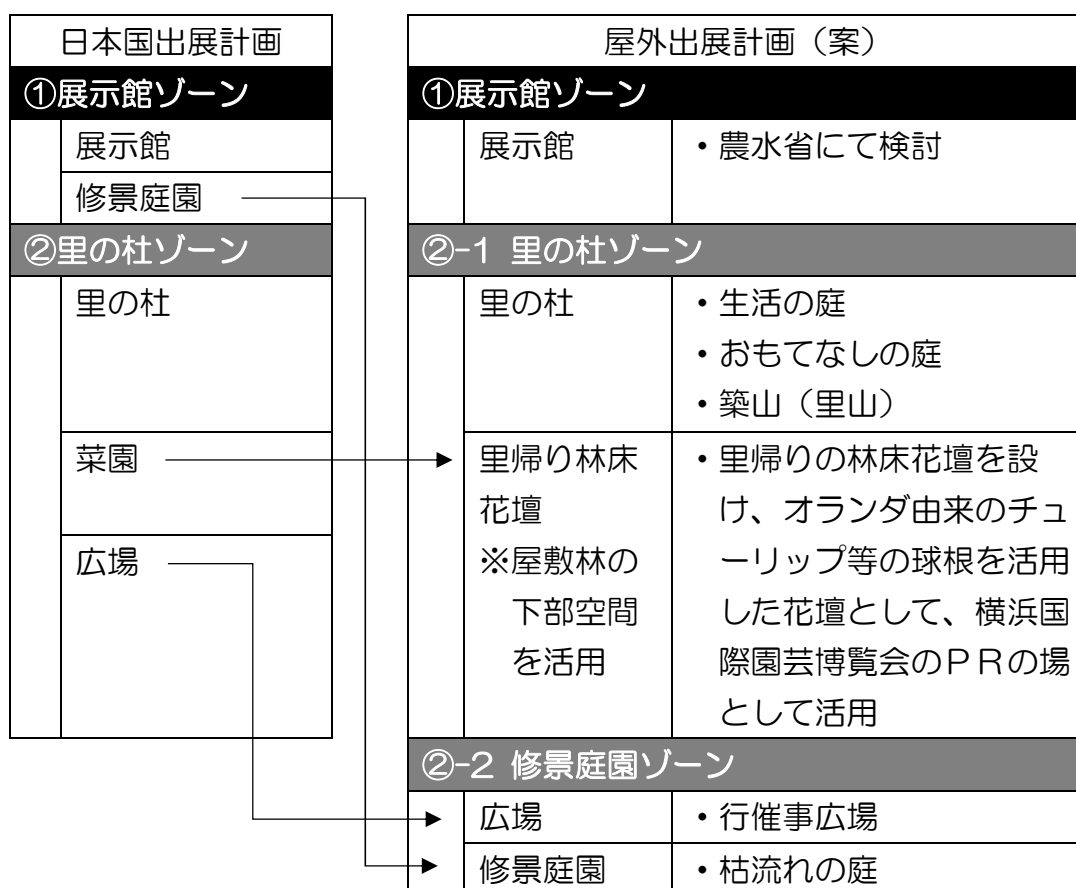
【テーマ】 SATOYAMA Farm Garden

関東平野にみられる農家及び屋敷林をイメージし、屋敷地と農地、里地、里山が一体となった日本の伝統的な循環型のライフスタイルを表現するとともに、現代の花卉園芸技術や花の文化を屋内・屋外トータルで展示する。

- 生態系サービスに生かされている人と自然の新たな関係の提示を目指し、“幸せを創る明日の風景”をテーマとする2027横浜国際園芸博覧会へと繋がる屋外出展を企画し、屋外出展全体において、自然と人との共生により形成されてきた里地里山の風景を想起させることを念頭に置くものとする。
- また、里地里山が長い歴史の中で様々な人間の働きかけにより形成され、豊かな生物多様性を育む環境であることにかんがみ、2021年に開催予定であるCOP15を見据えて、2010年のCOP10において合意された愛知目標のビジョンである「2050年までに、生物多様性が評価され、保全され、回復され、そして賢明に利用され、それによって生態系サービスが保持され、健全な地球が維持され、全ての人々に不可欠な恩恵が与えられる世界」を発信できる場となることを念頭に置くものとする。
- さらに我が国が取り組む、自然環境が有する多様な機能を賢く利用するグリーンインフラの発信を企画し、里地里山が有する生態系サービスの享受、日本の造園技術による良好な景観形成等を通じた持続可能な社会を表現できる場となることを念頭に置くものとする。

### (3) ゾーニング

- 日本国出展計画の内容を、以下のとおりゾーニングとして落とし込み、屋外出展を計画することとする。
- 日本国出展計画における里の杜ゾーンは、展示館の配置が概ね決定し、エントランス側、出口側と大きく分かれることとなるため、里山を表現した里の杜ゾーンと日本庭園的要素に特化した修景庭園ゾーンとして再編成している。



- 庭園に植栽する樹木は、川口市・川口市農業青年会議所が提供する樹木を基本として使用し、欧州内で調達する樹木は必要最小限とする。

### (4) 来園者動線の考え方

- 来場者動線とサービス動線は分離して設定。展示資材搬入路、展示館裏側バックヤードに資材搬入ゲートの設置を検討する。主園路 3.0m 以上、散策路・管理通路 1.2m を基本とする。来場者動線は一方通行とし、里の杜ゾーン側を入口、修景庭園ゾーン側を出口とする（展示館の動線とも整合）。

(5) 庭園の構成

① 里の杜ゾーン

【日本国出展計画】

**里の杜**：里地の風情を持つエントランスエリア。川口市安行の植木や技術を用い、四季の花木やカエデ等により、日本の四季の風情を日本庭園的に表現する。

**菜園**：花や野菜など季節に応じた栽培ができる畑。展示やイベントを横浜にちなむ形で行い、屋内展示とあわせ横浜園芸博覧会をPRする。

＜日本国出展エリアへの導入と鑑賞＞

- エントランス部分からは、茅葺が特徴的な農家建築を模した屋内展示館が来訪者の目を引き付けることから、入り口部分は冠木門を配置するとともに、その両側に竹垣を配置することで、屋内展示館と一体的に日本らしさを伝えることができる導入部として整備する。
- エントランスエリアとなる里の杜ゾーンは、横浜国際園芸博覧会のテーマである“幸せを創る明日の風景”、サブテーマである“自然との調和”“緑や農による共存”、会場コンセプトにある「里山で培われた思想が未来を広げ、花と緑が輝き、人と自然が共に紡ぐ明日の風景」を意識しつつ、日本の四季の風情が感じられる里地・里山の庭園景と農家建築の建物景が調和したエリアとして表現する。これにより、2027年に横浜で表現する「里山で培われた思想が未来を広げ、花と緑が輝き、人と自然が共に紡ぐ明日の風景」への期待を高める空間とすることを企図し、具体的に以下の演出をする。

エントランス 園路	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 日本を代表する桜（八重桜系（欧州産）等）を、コンテナ仕立てにして春の演出とする。</li><li>○ 横浜では、毎年開催しているイベント（「ガーデンネックレス横浜」）において、桜コンテナを出展し、開花後その桜が市内各所に旅立ち、移植先で育つことにより新たな花の名所となる取り組みを継続していることから、横浜における花の文化の発信をPRする空間とする。</li></ul>
生活の庭	<ul style="list-style-type: none"><li>○ 井戸やつくばい、灯籠などを配置し、展示館と一体として、日本風の懐かしい農家の風情、生活様式を表現した空間とする。</li></ul>

おもてなしの庭	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 農家に隣接する竹林をイメージし、臥龍垣等の多様な竹垣、自然石・日本の植木、ユリ花壇とのデザイン的調和による、日本の伝統的造園技法を活かした空間を創出。</li> <li>○ ユリは江戸期にオランダ商館医として来日したシーボルトがオランダに持ち帰り、日本の植物相の豊かさをヨーロッパに知らしめる契機となった植物であり、明治期以降には横浜港から大量に輸出され、日本とヨーロッパにおける園芸文化の発展に寄与した等の交流の歴史にかかる情報を発信する。</li> </ul>
築山（里山）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 築山を設けその周囲に雑木を配し、農家に隣接する里山の雑木林を表現した空間とする。</li> <li>○ また、ムラサキシキブ、ヤマツツジ、コアジサイ等の里山の花木を配すとともに、主園路にはコンテナ桜を配し、日本の四季の風情が感じられる空間とする。</li> <li>○ 里山に見立てた築山に粗朶を設える。粗朶は、明治初期にオランダ人技師（デ・レーケ）らにより日本の風土に即し定着した、自然材料を活用した国土保全の技術であり、グリーンインフラの取組として発信する。</li> </ul>
里帰り林床花壇 ※屋敷林の下部空間	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 林床には里帰り球根花壇により、横浜山下公園や横浜公園で展開されているチューリップ花壇により新緑間もない空間に彩りを添える。</li> <li>○ なお、チューリップ花壇はオランダの造園家の技術指導により、横浜に根付いた花壇であり、両国間の友好関係の証として発信することができる。</li> </ul>

## ② 修景庭園ゾーン

### 【日本国出展計画】

**広 場**：農家の庭先の広場。こいのぼりや灯籠など和風のしつらえを行い、イベントやレセプション会場などに活用する。

**里の杜**：里地の風情を持つエントランスエリア。川口市安行の植木や技術を用い、四季の花木やカエデ等により、日本の四季の風情を日本庭園的に表現する。

### <日本の伝統的造園技術と庭師の技を PR>

- 屋内展示館において日本の花卉園芸技術を堪能した余韻に浸れるよう、和風のしつらえを施した広場として、日本の庭園・園芸技術により修景された空間として活用することとし、具体的には以下の演出を計画する。

**枯流れの庭** ○ 農家の庭として、日本の伝統的造園技法である枯山水の庭を配置し、自然石と砂利による日本人の自然観を表現するとともに、川口市・川口市農業青年会議所が生産に力を入れている多様な灌木・地被類と融合した意匠をもつ空間とする。

**行催事広場** ○ イベント、レセプション及び横浜国際園芸博覧会の PR イベントの会場として使用できる空間とする。

## ③ 外周部分の設え

- 博覧会事務局が整備する植樹帯(W4.0、H0.2~0.5 程度、花壇・灌木)の内側は、日本の出展区域であることが印象付けられるよう竹垣(四ツ目垣等)を配置し、日本国の出展区域を印象付ける。展示館裏バックヤード外周はH1.8以上の目隠し用の竹垣を配置する。

## (6) 基本計画図・イメージスケッチ

別紙参照 (\*資料 2-4)

## (7) 整備方針

- 1 (1) ②のとおり、コロナウイルス感染症の状況により、最も厳しい見通しとして、現地企業により実施設計、施工及び施工監理を行うことを前提とした施工体制について検討を進める。施工体制の検討にあたっては、状況に応じて、日本人技術者による技術指導・施工監理を行う方策を検討する。

- 会期終了後に撤去(原状復旧)することを前提として、施工方法、資材の再利用等に配慮する。
- 整備及び維持管理コストの縮減に配慮し事業を進める。
- 整備にあたり現地の社会条件・自然条件等に配慮する。
- 出展の意図や庭の意図を解説するサイン(案内板)を設置し、文字による適切な情報の伝達に努める。
- 行催事広場等のスペースについて、協賛団体等の広報事業等に活用できるよう配慮する。

## 2. 日本国出展屋外区域の管理運営計画

国土交通省、農林水産省をはじめとする関係省庁、及び屋内出展事業関係者等との連携を図り、庭園の維持管理、行催事、広報等を実施する。

### (1) 維持管理計画

#### ① 日常管理

- ・ 日常の巡視、清掃等を屋内出展事業関係者等と連携を図りつつ実施し、清潔かつ安全な展示状態を維持する。

#### ② 植物管理

- ・ 植物管理にあたっては、自然豊かな住環境の保護と自然の持続可能な利用に視点をおき維持管理を進めることとする。
- ・ 樹木や草花の入れ替え、補修等については、現地企業等による実施を前提に検討を進める。コロナウイルス感染症の状況に応じ、日本から造園技術者の派遣も検討する。

#### ③ 接遇

- ・ 日本政府関係者や実行委員会構成団体等から訪問者のある場合は、屋内出展事業関係者等との連携を図りつつ、博覧会事務局との連絡調整等、現地での適切な対応が取れるような体制を構築する。



## (2) 行催事計画

今後、日本国出展委員会において決定される「行催事計画」を踏まえ、行催事を実施する。

### <想定される主要行催事>

#### ①博覧会開会式及び日本国出展開園式

- 1) 博覧会開会式：各国政府代表等が博覧会主催者から招待を受けて参加
- 2) 日本国出展開園式：開会当日に日本政府側主催でオープニングイベント（テープカット等）や関連イベントを実施

#### ②ナショナルデー（ジャパンデー）

- 1) 日本国政府公式行事：日本への理解を促進する行催事を開催
- 2) 日本国出展行催事：出展庭園において日本の造園緑化技術の発信・日本文化の紹介等の行催事を実施

#### ③博覧会閉会式及び日本国出展閉園式

- 1) 博覧会閉会式：各国政府代表等が博覧会主催者から招待を受けて参加
- 2) 日本国出展閉園式：閉会当日に日本政府側主催で庭園の閉園式を開催

## (3) 広報計画

#### ①マスコミ、観光業界への情報提供

- ・マスコミに取り上げてもらえるよう、適時の話題提供に加え、話題性のあるニュースソースの提供に配慮する。

#### ②ホームページの作成

- ・ホームページについては、屋内出展事業関係者等との連携を図りつつ、現地の様子をわかりやすく提供していく。

#### ③日本国出展 会場での広報

次の内容により、現地での日本国及び庭園、イベント等の紹介に努める。

- 1) 出展庭園の紹介パネルの作成
- 2) パンフレットの作成
- 3) その他、日本国をPRするパンフレット等の配布

以上